

# “An Elementary Grammar of the Japanese Language”についての一考察

－ローマ字綴りに注目して－

## A Study of “An Elementary Grammar of the Japanese Language”

- With a focus on writing in the roman alphabet -

福元 美和子

はじめに

馬場辰猪（1850-1888）によって著された“An Elementary Grammar of the Japanese Language”（以下、『日本文典初歩』）は、1873年に日本語初の口語教科書としてロンドンで出版された。本書は、同じ年に出版された森有礼の“Education in Japan”の中で唱えられた「日本語廃止論・英語採用論」に反対して、法学を学ぶ傍ら毎晩1ページずつ執筆し完成した。馬場自身がロンドン留学中であること、また金沢（2011）に「ホートン卿（Lord Houghton）という社会科学協会の一英国人に献じられた」とあるように、英語母語話者に合うように作成されていると言える。初版から3版（馬場の死後出版された）まで出版されたが、アーサー・ディオシー（1856-1923）や新渡戸稲造（1862-1933）、その妻の萬里子らが教科書として使用したことがわかっている。

これまでも本書について、多くの研究がなされてきたが、馬場のローマ字綴りについて言及しているものはなかった。本稿では、馬場が書き示したローマ字表記の五十音図をはじめ、本文中の綴り方について、「ヘボン式」「日本式」との関係も含めて考察を試みたい。

### I. ローマ字表記の意義

小嶋（2001）は、日本語とローマ字との関係を2つの時代（室町時代末期～江戸末期、明治維新～現代）に分けて年表に表し、「前半の時代が、主に外国人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代であるのに対し、後半の時代は日本人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代」（p20）であることを述べた。また、市井・根岸（2007）は、ローマ字の特徴と意義について、以下の様に述べている。

ローマ字は、まず第一に、単音を表記する単音文字（音声を母音や子音などに分散して表記する）である。その文字が、その国でどのような音をもって発音されているのかがわかれば、ローマ字で綴られたものは、たとえ自国のことばでなくとも、そのまま正確に発音することが可能になる。（中略）いわゆる分かち書きという方式によって、単語を明示する文字である。そのために、個々のスペルの分かち書きに注目すれば、書かれたもの（それを書いた／編纂した人物）の単語意識をも推測することができるのである。（p26）

さらに、学習者の日本語習得の視点から、ローマ字書きの利点を下記の様に述べている。

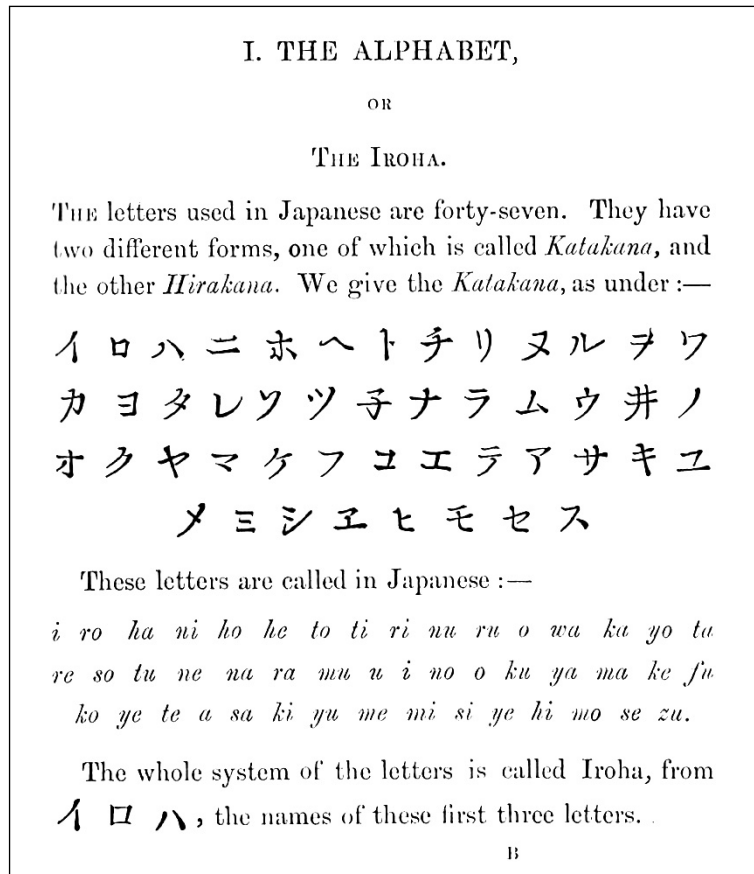
「耳で聞いた日本語の音（発音）を、そのまま単音文字であるローマ字であらわし、そのローマ字であらわした日本語をそのまま発音する」方式で学習することで、かなり日本人に近い発音を可能にしたと思われる」（p29）また、「分かち書きの部分で単語を意識し、語のまとまりをとらえることによって、話しをしていく上での区切りやリズムについても、日本人に近い調子であったと推測できる。分かち書きによって単語の単位を意識することで、日本語の文法現象をとらえることができたのではないかと思われる。」（pp29-30）

以上を満たしている馬場の『日本文典初歩』は文献としての価値があり、馬場のローマ字綴りについて考察

する意義は大きいと言える。

## 2. 馬場の五十音図について

馬場は『日本文典初歩』で、まず日本語には47文字あり、カタカナとひらがなの2通りの標記の仕方があることを説明し、イロハ順に仮名とローマ字を掲載している。



【図1】 Baba-Tatui: An Elementary grammar of the Japanese Language (1873) のイロハ音図 (『馬場辰猪全集 第1巻』 p17 より)

“An Elementary Grammar of the Japanese Language” についての一考察 – ローマ字綴りに注目して –  
次に、母音 (aiueo) に基づき五十音図 (【図 2】) を示している。

2

Vowels.

2. THE VOWELS.

Of the above forty-seven, five (ア イ ウ エ オ) are vowels; the sounds of these five letters are as follows:—

*a* ア has the sound of *a* in master, or mama.

*i* イ „ „ *i* in inland.

*u* ウ „ „ *u* in queen.

*e* エ „ „ *e* in echo.

*o* オ „ „ *o* in month.

The rest of the letters are arranged according to these five vowels, as follows:—

<i>a</i>	ア	<i>i</i>	イ	<i>u</i>	ウ	<i>e</i>	エ	<i>o</i>	オ
<i>ka</i>	カ	<i>ki</i>	キ	<i>ku</i>	ク	<i>ke</i>	ケ	<i>ko</i>	コ
<i>sa</i>	サ	<i>si</i>	シ	<i>su</i>	ス	<i>se</i>	セ	<i>so</i>	ソ
<i>ta</i>	タ	<i>ti</i>	チ	<i>tu</i>	ツ	<i>te</i>	テ	<i>to</i>	ト
<i>na</i>	ナ	<i>ni</i>	ニ	<i>nu</i>	ヌ	<i>ne</i>	ネ	<i>no</i>	ノ
<i>ha</i>	ハ	<i>hi</i>	ヒ	<i>fu</i>	フ	<i>he</i>	ヘ	<i>ho</i>	ホ
<i>ma</i>	マ	<i>mi</i>	ミ	<i>mu</i>	ム	<i>me</i>	メ	<i>mo</i>	モ
<i>ya</i>	ヤ	<i>yi</i>	イ	<i>yu</i>	ユ	<i>ye</i>	エ	<i>yo</i>	ヨ
<i>ra</i>	ラ	<i>ri</i>	リ	<i>ru</i>	ル	<i>re</i>	レ	<i>ro</i>	ロ
<i>wa</i>	ワ	<i>wi</i>	井	<i>wu</i>	ウ	<i>we</i>	エ	<i>wo</i>	オ

18

18

【図 2】 Baba-Tatui: An Elementary grammar of the Japanese Language (1873) の音図 (『馬場辰猪全集 第 1 巻』 p18 より)

また、発音について以下の記述をしている。

エ and エ, イ and 井, オ and オ, are distinguished by ancient usage, but at the present time the distinction is no longer observed.

In most parts of Japan, ゼ di and ジ zi, ヅ du and ズ zu, are distinguished from one another in their pronunciation, although they are pronounced alike in some parts of the country. (p.19)

## 2. 2 馬場の音図と「ヘボン式」、「日本式」との比較

日本では当時、馬場が『日本文典初歩』を執筆する 1 年前の 1872 年に南部義壽が文部省にローマ字採用に

関する建白書を提出しており、すでにローマ字論は起こっていた。また、同じ年にヘボンの『和英語林集成』（第2版）が出版され、日本語のローマ字の「ふ」について「hu」から「fu」に修正されている。以下にヘボン式ローマ字音と日本式ローマ字音を示す。

・「ヘボン式」

ア a	カ ka	サ sa	タ ta	ナ na	ハ ha	マ ma	ヤ ya	ラ ra	ワ wa
イ i	キ ki	シ shi	チ chi	ニ ni	ヒ hi	ミ mi	イ i	リ ri	非 i
ウ u	ク ku	ス su	ツ tsu	ヌ nu	フ fu	ム mu	ユ yu	ル ru	ウ u
エ e	ケ ke	セ se	テ te	ネ ne	ヘ he	メ me	エ ye	レ re	エ e
オ o	コ ko	ソ so	ト to	ノ no	ホ ho	モ mo	ヨ yo	ロ ro	ワ o

【図3】ヘボン『和英語林集成』第3版（1886）の音図（論文末【使用テキスト】Introductionより）

・「日本式」

a	ka	sa	ta	na	ha	ma	ya	ra	wa
i	ki	si	ti	ni	hi	mi		ri	
u	ku	su	tu	nu	hu	mu	yu	ru	
e	ke	se	te	ne	he	me		re	
o	ko	so	to	no	ho	mo	yo	ro	wo

【図4】『日本語百科大事典初版（1988）の表1 訓令式・日本式・ヘボン式つづり方対象表を基に筆者作成

【図3】及び【図3】の五十音図と馬場の五十音図を比較すると、馬場はfu以外について「日本式」を採用していることがわかる。この点については、これまでの先行研究でも明らかにされてきたことである。

唯一、田丸（1931）は、馬場の『日本文典初歩』に使われているローマ字綴りについて以下の指摘をしている。

馬場氏、西氏及び大西新聞のは、大體発音に従ってゐるが、イギリス風の影響を多少保存して、フをばhuとせずfuとしてゐる。拗音では、馬場氏は、sha,shu,sho;cha,chu,cho;ja,ju,jo、を用ひ、大西新聞ではsia,siu,sio;tio;ziu,zioなどが使われてゐる。（p136）

ただし、馬場が「フ」音をfuとした理由については記述がなく、田丸（1931）の記述の通りイギリス風の影響であるのかは定かではない。

指摘のある拗音については、『日本文典初歩』で使用されている拗音の一部を紹介する。

シャ

Sha（ヘボン式）	Jokisha
Sya（日本式）	なし

シュ

Sha（ヘボン式）	Teishu
Sya（日本式）	なし

シヨ

Sha（ヘボン式）	shosei shomotu ikimasho itashimasho motteimasho mairimasho dekimasho uketorimasho mimasho kimasho tokemasho
Sya（日本式）	なし

その他の拗音についてもすべて「ヘボン式」を使用していた。馬場が『日本文典初歩』を執筆したと推測される以前に、同じロンドンでサンマースによって発刊された『大西新聞』は日本式ローマ字の音図が示されている。馬場が参照したという記述はないが、新聞に目を通していた可能性は高いと考えられる。

### 3. 馬場のローマ字綴りについて

前節では、『日本文典初歩』に関して「音図＝日本式」、「本文＝ヘボン式」が使用されていることを示した。本節では『日本文典初歩』本文および練習問題の部の日本語文のローマ字綴り、特に音図と異なる箇所について検証したい。

#### 3. 1 「シ」と「チ」

「ヘボン式」と「日本式」とを分ける重要な点の一つである「シ」と「チ」は、馬場の日本語文の中で揺れていることがわかった。

「シ」※本文出現のまま

shi (ヘボン式)	moshi nashi kushi
si (日本式)	Sosirimasita Ikimasita hanasimasu simasumai Sosirimasita Sukimasita Orimasita Hanasi kosirayemasita mottteimasita sibai

「チ」※本文出現のまま

Sha (ヘボン式)	chichi uchini Nichi ya dai-ichini konnichi miyo-michi
Sya (日本式)	utimasu tukaku tukaku tomodati Mainiti uti Niti-niti Nitiyoniti Mainiti

内田(2016)は、「ヘボン式」の「サ行」「タ行」の子音の不統一が日本語音に与えた影響を下記の様に述べている。

ヘボン以前の近世の研究において、「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性に言及したものはほとんどみられない。ヘボン式綴り方の音図によって「シ」「チ」「ツ」の子音の特殊性が認識され、これらの子音の考察の中で「シ」を「シャ行音」、「チ」を「チャ行音」として捉える記述が現れる。(名古屋言語研究 p41)

さらに内田(2016)は、青木輔清述(1886)『英学童子解』初編の「羅馬字ニテ日本語ヲ綴ルノ解」及び岡倉由三郎(1897)『日本文典大綱』の「シ」「チ」「ツ」と「拗音」考を示し、高賀説三郎、三矢重松、大島正健らの論考と併せて、下記の様に述べている。

ここで重要なのは、これが日本人独自の分類法であるということである。ヘボンの『和英語林集成』に「拗音」という概念は存在しない。和英の部に【sha】【shi】【shu】【sho】、【cha】【chi】【chu】【cho】等で始まる日本語の単語は見られるものの、それらを同類の音節としてシステムティックに捉えることはない。「シ＝シャ行」「チ＝チャ行」「シ・チ・ツ＝拗音」といった捉え方は、伝統的音韻学で使用されてきた音図や概念に、ヘボン式綴り方を導入したことで得られた新たな認識である。(p42)

彼によって「ヘボン式」の「サ行」「タ行」から独自に発見されたことを、馬場も同じように気づいていたのかもしれない。馬場は、前節 2. 2 で紹介した「シャ」「シュ」「ショ」以外に「チャ」「チョ」についても「ヘボン式」のみを使用している。

チャ

Sha (ヘボン式)	cha
Sya (日本式)	なし

チヨ

Sha (ヘボン式)	Hôchô konchô chônin
Sya (日本式)	なし

田丸(1930)が述べている様に、「馬場がイギリス風の影響を受けていた」としたら、ヘボンの『和英語林集成』を見て、青木(1897)や岡倉(1897)同様のことを先に考えつき「ヘボン式」と「日本式」を意図的に使い分けて書き示したのかもしれない。しかし、本文にその明記はなく、これまでの先行研究でも明らかにされていない。一つ言えるとしたら、「ヘボン式」は名詞を書き記す際に多く用いられており、動詞の活用に関わる語幹には使われていないということである。

### 3. 2 動詞を「日本式」で書くことの効果

これまでの先行研究でも、馬場の動詞についての説明が今日の日本語教育と同じ3分類法をとっていることは既に論じられてきた。本節では、この3分類法の記述法に注目したい。

馬場は、日本語のすべての動詞は3つのグループに分類でき、それぞれのグループで規則的な語形変化をすると説明した。【図4】に第一種グループのみ示す。

<i>Conjugation of Regular Verbs.</i>	
First conjugation ending in U— <i>Iku</i> , To go.	
<i>Indicative Mood.</i>	
Present Tense.	
<i>Watakushi wa ik-imasu</i> , I go.	<i>Watakushi domo wa ik-imasu</i> ,
<i>Anata wa ik-imasu</i> , you go.	we go.
<i>Are wa ik-imasu</i> , he or she goes.	<i>Anatagata wa ik-imasu</i> ,
	you go.
	<i>Arera wa ik-imasu</i> , they go.
Past Tense.	
<i>Watakushi wa ik-imasita</i> , I went or have gone.	<i>Watakushi domo wa ik-imasita</i> ,
<i>Anata wa ik-imasita</i> , you went or have gone.	we went.
<i>Are wa ik-imasita</i> , he went, or has gone.	<i>Anatagata wa ik-imasita</i> ,
	you went.
	<i>Arera wa ik-imasita</i> , they went.
Future Tense.	
<i>Watakushi wa ik-imasho</i> , I shall go.	<i>Watakushi domo wa ik-imasho</i> ,
<i>Anata wa ik-imasho</i> , you will go.	we shall go.
<i>Are wa ik-imasho</i> , he or she will go.	<i>Anatagata wa ik-imasho</i> , you will go.
	<i>Arera wa ik-imasho</i> , they will go.

【図4】 Baba-Tatui: An Elementary grammar of the Japanese Language (1873) の音図 (『馬場辰猪全集 第1巻』p28 より)

上記【図4】は、現在の日本語教育で言われるところのⅠグループについて説明しているが、辞書形「いく」を *iku* と表すことで「ik-」を語幹として変化していくことを説明している。馬場が、動詞の語幹について一貫して「日本式」を使用しているのには、文法説明するを考える上で気づきがあったのかもしれない。

本文には表れていないが、例えば、同じ【図3】と同じ第一種グループの「打つ」という動詞の語形変化を説明する場合、「日本式」で示すほうが語幹の共通性を示すことができ学習者が混乱を起しにくい。

・「ヘボン式」	・「日本式」
<u>u</u> tu	<u>u</u> tu
<u>u</u> chi-masu	<u>u</u> ti-masu
<u>u</u> chi-masita	<u>u</u> ti-masita
<u>u</u> chi-masho	<u>u</u> ti-masho

馬場自身の記述はないが、すべての動詞を「日本式」で書き示すことで、「ヘボン式」の場合のように語幹が変化してしまうことを防ぐことができ、体系化した語形変化を説明できると気づいたのではないかと推測できる。これまでの先行研究では、動詞の3分類法を見出したことだけが論じられてきたが、動詞およびその語形変化を「日本式」で書き示していることも強調しておきたい。

上記のことは、のちにローマ字論争へと発展していく過程の中で、田丸（1930）も同じ主張をしていることも併せて記述しておく。（『ローマ字国字論』p116を参照のこと）

#### 4. おわりに

本稿では、まず『日本文典初歩』で出されている音図を、「ヘボン式」及び「日本式」と比較し、これまでの先行研究で述べられていた通り、馬場は大部分は「日本式」を支持していたことを考察した。

次に、これまで注目されてこなかった本文及び練習問題の部で使用されているローマ字綴りについて考察を行った。その結果、馬場は、特に拗音に関しては「ヘボン式」を使用し、動詞については「日本式」、名詞に至っては両式を混合して使用していることが明らかとなった。

動詞を、「日本式」で書き示すことで、語幹を保ったまま、活用を説明できることに気づいての選択ではなかったか。また、拗音については、「ヘボン式」から青木（1886）らの様な独自の発見を既にしていたのではないかという可能性を見出せた。

これまでの先行研究にはなかった馬場のローマ字綴りを考察することで、後世の学者らが発見し論文として残したことに先見の明があったのではないか。このことを明らかにするには甚だ不十分であるが、これまでの馬場の日本語文法考察あるいは日本語観考察に新たな視点を付与することができたと考える。また、その一方で、今回新たに不明な点や疑問を見つけることもできた。例えば、2節で、馬場は「エ」と「エ」は音の区別がないと記述していると述べたが、本文及び練習問題の部での使用は偏ったものであった。

e	なし
ye	miyemasu kangayeru wuyeni mayeni mayewo iye koyete ye Yedo kosirayemasita hirumaye Iye

今回の考察では、なぜ「エ」にあたる *e* の使用が見られなかったのか明らかにできなかった。当時区別がなかったとは言え、何らかの影響や意図があったのではないかと考える。この他、新たに見つけることができた不明点や疑問は、次稿への課題としたい。

参考文献

- 市井外喜子・根岸亜紀（2007）『天草版平家物語研究』おうふう
- 内田智子（2016）「ヘボン式綴り方が近代の音声研究に与えた影響－サ行子音・タ行子音を中心に－」『名古屋言語研究 第10号』
- 金沢朱美（2011）『ヘルンさん言葉の世界 小泉八雲の日本語と明治期の日本語教育をめぐって』近代文藝社
- 金子尚一（1981）「馬場辰猪の“日本語文法”－試訳－」『共立女子大学紀要第二十四号』共立大学
- 金子尚一（1982）「続・馬場辰猪の“日本語文法”」『共立女子大学紀要第二十五号』共立大学
- 菊澤季生（1931）『國字問題の研究』岩波書店
- 金田一春彦・林大・柴田武（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
- 小嶋栄子（2001）「日本におけるローマ字の歴史」『研究報告 第22号』日本語文法研究会
- 鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂
- 田丸卓郎（1930）『ローマ字國字論』岩波書店
- 根岸亜紀（2001）「ローマ字による日本語文法の研究」『研究報告 第22号』日本語文法研究会
- 萩原延壽（2007）『馬場辰猪』朝日新聞社
- 馬場辰猪（19887）『馬場辰猪全集 第一卷』岩波書店
- 李長波（2010）『近代日本語教科書選 第1巻』クロスカルチャー
- 李長波（2010）『近代日本語教科書選 第10巻』クロスカルチャー
- 山田孝雄（1935）『国語学史要』岩波全書

長崎短期大学研究倫理委員会承認【第1807号】